

比べ読みで身につく学力

古典学習指導の実際－『枕草子』の授業から（１）－

金子 直樹

新学習指導要領では、新設「古典B」の内容として「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。」という「読み比べ」の事項が新たに加えられたが、これは従来の古典指導の実際としても各教室で行われてきたことでもある。「読み比べ／比べ読み」の学習によって、どのような学力がつくのかを具体的に検証し、特に古典学習における意義を再確認する。

1. はじめに

国語科の授業における「読み」とは、生徒が作品世界や作品そのものを具体的な場として、作中人物や作者を対象物にして、自己を問うことである。授業では、そのような場や対象を幅広く深く仕組むことで、生徒の自己への問いかけを促すことをめざしている。

しかし、自戒を込めて言えば、特に「古典」の授業では、「読み」の焦点が作中人物や作者に限定されて、情緒的な古典世界（人間）像の理解に止まってしまうがちである。古典語を扱う言語抵抗による技能的な問題や、正確な理解に至るまでの時代状況や概念把握に要する手間の問題もあるが、作品世界や作者の対象化を精緻に行うほどに、本来問うべき生徒の自己がかえって切り離され、希薄化してゆく危険性がある。

問題は、授業で何をめざすのかという「読み」の方向である。無論それは恣意的な問題設定や放恣な解釈によるのではなく、テキストを正確に理解することから始まるのであるが、「昔の人の考え方が分かった」「古典の世界（感覚・人間関係…）の良さが分かった」で終わりにするのではなく、生徒自身がそのように理解する自己を追跡して、テキストと自分との関係を見出したり、自己を問う契機となるように仕向けることである。

新しい指導要領では、新設「古典B」の内容として「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。」という文言が加わる。「読み比べ／比べ読み」を授業に用いることは、国語科の授業においては指導要領云々以前の当然のことであるが、何のために「比べ読み」を行うのかということを、この機会にあらためて明確にしておきたい。異なるテキストを比較検討する「比べ読み」の活動を加えることで、生徒は自身の読みをいったん対象化することになり、それが単なる感想・

印象から批評・評価へと深化してゆく契機となることをめざすのである。それは、「読みの構えの獲得」や「読みの方法の習得」と言うこともできるだろう。そのような視点を持って「比べ読み」を取り入れた授業を構成してゆくことを心がけておきたい。

2. 『枕草子』類聚的章段の扱い

『枕草子』は「をかし」の文学である、という言い方がある。高校生であればその程度の一般的な知識を持つてはいるが、それでは、「をかし」の文学とはどういうことなのか？と正面切って問われると、これは難しい。「をかし」とは「知的な興味関心などに関して、趣深いこと」と辞書的な説明をしても、それで分かったということにはならないだろう。

また、『枕草子』には筆者清少納言の鋭い観察眼が表れている、ということもよく言われるが、何ををもって「鋭い観察眼」と言うのか、ということについても同様である。『枕草子』をめぐって、「をかし」の文学であるとか、「鋭い観察眼」であるという知識を持っていて、それはそれで別に悪いことはないが、その内容を検討せずに鵜呑みにするのであれば、それはただ文学史的な知識を吸収するだけであって、自分で考えるということにはならないし、また、『枕草子』を読む意味も十分なものにはならない。

2009年度広島大学附属福山高等学校2年生の古典の授業で『枕草子』を取り扱うにあたって、各章段の「比べ読み」を通して、『枕草子』に用いられている「をかし」の意味を生徒自身が自分の考え方として理解できることをめざした。また同様に、『枕草子』に表されている「鋭い観察眼」を生徒自身が自分の感覚として理解できることをめざした。

以下に、主に一学期に扱った類聚的章段の授業の実際と、生徒の到達度について報告する。

3. 単元展開1－導入と全体像把握－

最初の授業で、『枕草子』類聚的章段中の「ものづくし」系と呼ばれるもの全74段の題目を、次のような形で「題目一覧」としてプリントで提示した。(諸本や教え方によっても異なるが、『日本古典文学大系』によって授業者がまとめた。)

- 「6 同じことなれども聞き耳ことなるもの
(同じ事を言っても聞いた感じが違うもの)
- 26 たゆまるるもの
(自然と気がゆるむもの)
- 27 人にあなづらるるもの
(人からばかにされるもの)
- 28 にくきもの
(しゃくにさわるもの)
- 29 心ときめきするもの
(胸がときめくもの) (以下略)」

また、その中から、本文の短いもの、特に注釈や口語訳が無くても理解可能なものをいくつか選び、次のような形で「小品集」としてプリントで提示した。

- 「26 たゆまるるもの
精進の日のおこなひ。遠きいそぎ。寺に久しく籠もりたる。
- 27 人にあなづらるるもの
築地の崩れ。あまり心よしと人に知られぬる人。
- 71 たとしへ無きもの
夏と冬と。夜と昼と。雨降る日と照る日と。人の笑ふと腹立つと。老いたると若きと。白きと黒きと。思ふ人と憎む人と。同じ人ながらも、心ざしある折と変はりたる折は、まことにこと人とぞおぼゆる。水と火と。肥えたる人、痩せたる人。髪長き人と短き人。 (以下略)」

この「題目一覧」と「小品集」のねらいは、類聚的章段の全体像と、筆者清少納言の感覚を、まずは大づかみに理解することである。

高校生が古典を嫌う理由の一つに、「考えても分からない」ということがあると思う。いくら勉強しても、現代の感覚や考え方とは異なる「古典」の常識や感覚が、次々に出てくる。教師の側では、順を追ってテキストや題材を配置して飛躍を少なくしたつもりでも、背景知識のない生徒にしてみれば、針の穴から全体を覗くような見えづらさや、悪く言えば「あと出し感」のようなものがあって、自分で考えるのよりも先生の解説を聞いた方が楽だ、という気分になるのかもしれない。

このような「題目一覧」プリントを一見したところ

で、『枕草子』の全てが理解できるわけではもちろんない。それでも、「ものづくし」と言われる段にはどのようなものがあるのかということ、少しでも視野の中に入れておくことで、他の段とのつながりを意識して読む姿勢にはつながると考える。

今回の授業では「題目一覧」「小品集」をプリントにして与えたが、文庫本を与えておいて「目次」を用いて短い章段を探させるという活動も考えられる。いづれにせよ、このような形で読みの構えを作ってゆくことが、「比べ読み」をするにあたっての重要な点である。

4. 単元展開2－例題・基本形の習得－

「比べ読み」を行うにあたっては、「比べ」る元の形を明確に意識することが最初の活動になる。25段「すさまじきもの」全文を読んで、『枕草子』の類聚的章段の叙述方法や、清少納言の感覚の表し方を読み取ることから始める。具体的には、「共通感覚の項目列挙」から「清少納言自身の経験や観察に基づく感覚」へと叙述が深化してゆく「構成」を読み取り、他の章段を読む際にも応用可能な類聚的章段の「文体」として理解することである。

「すさまじきもの」は、長さの関係からか、全文扱いではなく「除目に司得ぬ人の家」を中心とした部分扱いで掲載されることが多いようであるが、実際の授業でそのように扱うのはもったいないと思う。取り上げられたトピックとして「除目に司得ぬ人の家」の様子だけでなく、何をどのように「すさまじ」と捉えるのかという清少納言の感覚の把握が失われるからである。

以下に、「すさまじきもの」授業の学習記録を抜粋して紹介する。(傍線部は引用者、以下同じ)

生徒学習記録1

今回は、一般的な感覚の後に記されている、清少納言の思う「すさまじきもの」を確認しました。まず、地方から届く手紙で贈り物がないもの、そして美しく包んで送ったにもかかわらず、返事もなくぼろぼろになって返ってきた手紙、楽しみに待っていたのに来なかった人、別の女の許に通ってしまって家へ来なくなってしまった男と続きます。先の二つは「手紙」つながり、そこから次は「来ない」をキーワードにして期待が裏切られてがっかりした話を、清少納言が連想ゲームのように書いています。期待はずれでがっかりな気持ちは、使いの者の何とも無関心な様子によっても、より読み手に伝わりました。

生徒学習記録2

「すさまじきもの」で清少納言は、がっかりで興ざ

めなもののみを記していますが、順を追って読んでゆくと、小話をたくさん読んでいよう面白く、後ろ向きな話題であるのになぜか軽快にすら感じられます。清少納言の連想の能力や発想の展開の速さがプラスになって、文全体にリズム感を作っているようでした。期待があって→それが外れる、という枠組みに沿っての細かな文の作りの変化や、「ゆるぎありきたる」といった現代に生きる私たちにも読み取れる気持ちをも含む描写、具体的な場面設定も、文章を読んでいて飽きることのない要因になっているのだと思います。これが清少納言の筆力ということなのかと思いました。

5. 単元展開3－発展・比べ読みの実際－

「すさまじきもの」での学習をふまえた上で、テーマの違う他章段の「比べ読み」を通して、類聚的章段における清少納言の観察眼の表れ方や、文章表現の特徴について理解する。また、より深い観察や心情を表す場合には形容詞「をかし」が共通して用いられているということに気付き、清少納言の感覚や表現を特徴づける語として理解する。

取り扱った章段は、次の各段である。

75段ありがたきもの

276段うれしきもの

119段あはれなるもの（問題演習形式）

152段人ばえするもの（問題演習形式）

95段ねたきもの

125段むとくなるもの

取り扱いのポイントとしては、以下の二点に重点を置いて、「すさまじきもの」との比べ読みを行った。

①例題「すさまじき」の応用発展として、類聚的章段に見られる、項目列挙からエピソードの詳述へという文章展開を具体的に確認する。

②清少納言が好んで取り上げる感覚、人の心をくすぐったり、ひとひねりを加えたような心情や状況の表現を具体的に確認する。

実際の授業での生徒の反応は以下の通りである。

生徒学習記録3（ありがたきもの）

今回は『枕草子』の「ありがたきもの」を学習した。前回まで読んでいた「すさまじきもの」は題名を一目見た時点でマイナスイメージを持ったが、今回のこの題名から受けたイメージは言うまでもなくプラスのイメージ。どんな明るい内容が書かれているのか楽しみに思った。が、実際読んで先生の解説を聞いてみると……。別に明るくも楽しくもなんともない。むしろなんだか寂しくなることが書かれていた。

なるほど、この「ありがたきもの」というのは「有

るのが難しいこと」であって、私が最初持ったイメージの現代語の「ありがたいもの」とは全く違うのか、と読んで気付いた。でもそれよりも、わざわざそんなことをピックアップして文章にする必要があるのか？ なんだか「すさまじきもの」でも感じた、独特の清少納言の臭いがする。清少納言は、今のところ、マイナスな話しか書いていない。具体的な例を生活の中からピックアップしていることが共通しているが、「毒舌」というか「悲観的」というか「冷静」というか「冷酷」というか「現実的」というか。なかなか一口では表せない性格を彼女はどうやら持っているようだ。

生徒学習記録4（ねたきもの）

今日からは「ねたきもの」。明らかなマイナスイメージの章段です。

今回も、「(現代人にも分かる)一般的な論」→「清少納言の独自のコンセプトに基づいた論」というフォーマットでした。(余談ですが、こういう所は几帳面なのに、なんで「うれしきもの」とかでは話をしっかりまとめないんですかね？ もともととはまとまっていたのに、書き写していくうちに…なんてことも考えちゃいます。)

さて本題。清少納言の「におい」を求め、今日は清少納言の宮中でのお友だちの話です。この女性は詭弁家として、理屈の通らないことを言う。「こそ已然形」の逆接用法や、敬語に注意すると主語の特定も楽になって、話の内容が取りやすく、その無茶苦茶っぷりがよく分かりました。そんなエピソードを「をかし」という表現でまとめた清少納言。前の「うれしきもの」でも、「うれし」→「をかし」という位相転換がありました。「をかし」というのは、清少納言の、いや、当時の貴族文化の中で、大きな位置を占めていたのではないのでしょうか。「をかし」という表現は、源氏物語などの「あはれなり」よりも知的なニュアンスを含んだ言葉ですよね。そんなところからも、清少納言の「におい」が感じられると思います。

一連の類聚的章段についての学習で、125段「むとくなるもの」を扱った。この段は諸本によって異同があるが、『日本古典文学大系』によって、以下を本文として扱った。

「むとくなるもの。潮干の潟にをる大船。おほきなる木の風に吹き倒されて、根をささげ横たはり臥せる。えせ者の従者勘へたる。髪みじかき人の、ものとりおろして、髪けづりたるうしろで。翁のもとどり放ちたる。相撲の負けてゐるうしろで。人の妻の、すずろなるもの怨じして隠れたるを、必ずたづね騒がむものぞ

と思ひたるに、さしもあらず、のどかにもてなしたれば、さてもえ旅だちみたらねば、心と出で来たる。

なま心おとりしたる人の知りたる人と、心なること言ひむつかりて、ひとへにも臥さじと身じろぐを、引き寄すれど、強ひて強がれば、あまりになりては人もさはれとて、かいくみて臥しぬる、後に、冬などは、単衣ばかりをひとつ着たるも、あやにくがりつる程こそ、寒さも知らざりつれ、やうやう夜の更くるままに、寒くもあれど、おほかたの人もみな寝たれば、さすがに起きてもえ行かで、ありつる折にぞ寄りぬべかりけると、目もあはず思ひ臥したるに、いとど奥の方より、もののひしめき鳴るもいと恐ろしくて、やをらよろほひ寄りて、衣をひき着るほどこそむとくなれ。人はたけく思ふらむかし、そら寝して知らぬ顔なるさまよ。」

「むとくなるもの」授業展開の実際例を、学習指導案(略案)の形で提示する。

1. 単元・教材

『枕草子』 本時教材「むとくなるもの」

2. 本時の目標

- ①「むとくなるもの」に描かれている状況を正しく読み取る。
- ②『枕草子』類聚的章段における話題の展開や、表現の特徴を理解する。
- ③古語単語や文法の知識を生かして、文章を正確に読解する。

3. 本時の評価基準

- ・音読や筆写を通して、古文を読むことに意欲的に取り組んでいる。
- ・「むとくなるもの」に描かれた男女の状況を、表現に即して正しく理解している。
- ・『枕草子』の他の章段も比較参照しながら、筆者の表現意図を読み取ろうとしている。
- ・係り結びの法則など古典文法の知識を生かして、古文の内容を正確に読み取っている。

4. 本時の授業展開

○は学習活動、*は指導上の留意点、・は評価の実際

(1) 導入

○前時までの学習内容を確認し、本時の目標を提示する。

*既習の類聚的章段「ねたきもの」・「うれしきもの」で学んだ読み取りの方法を生かしてゆくことを確認する。

(2) 展開Ⅰ(5分～)

○「むとくなるもの」前半部分を読む

①範読、斉読

②形容動詞「むとくなり」の意味、文脈に合う訳語

を考える。

*本文に取り上げられた事柄から、「むとくなり」の意味を推理し考える。特に冒頭の項目列举の事項(相撲の負けてゐる後ろ手など)を、具体的にイメージする。

*ノートに記入させ、発表させる。

記入状況に注意し、できていないようであれば「無徳」という文字(意味)を与えて、適合する訳語を考えさせる。

・ノートに書き込んでいることで評価する。

③「人の妻の」の一文に表された「むとくなる」状況を読み取る。

*状況を文脈に即して具体的に理解するために、主語の補い、指示語内容の確認などを行う。

*本文中の言葉「人の妻」と、それと対応する「夫」という項目を設定し、板書に位置づける。

(3) 展開Ⅱ(20分～)

○「むとくなるもの」後半部分を読む

*冒頭の共通理解・一般的事項から、筆者の経験的・具体的出来事への話題の展開という『枕草子』の方法を想起し、読みの方向を示す。

*前半部分と対応する構造を板書に位置づける。

④斉読

(「衣をひき着るこそむとくなれ。」まで)

⑤前半部分での読み取りをふまえて、「むとくなる」状況を読み取る。

*男女間の愛情のもつれに関する話題であることを確認した上で、話題の主体は男女どちらであるのかという問いかけから、読み深めて行く。

・『むとくなる』のは男か女か?という問いかけに挙手で答えていることで評価する。

・挙手の状況から、生徒の自分の読みへの自信を測る。

○読みの目当てを立てて文脈を正確にたどり、立てた目当てを確認しながら読む。(方法)

○『枕草子』に描かれている状況の滑稽さと、筆法の皮肉さを理解する。(内容)

*「あやにくがりつる程」と「ありつ折」とが、それぞれいつのことであるのか、本文の描写から具体的に指摘する。

*「強いて強がる」から「むとくなり」への転換点として、「あやにくがりつる程こそ寒さも知らざりつれ、」の「こそ―已然形、」逆接用法を確認する。

*古語単語や文法事項は、文脈理解の必要に応じて指導者から簡潔に説明する。

・本文プリントに線を引き結びつけていることで評価する。

(4) 終結 (40分～)

- ⑥末尾の一文による「まとめ」の役割を理解する。
○描写の視点の転換が起こっていることを理解する。
*「人はたけく思ふらむかし…」の「人」が、それまでの叙述の対象としての「女」ではなく、「男」であることを確認する。
*「男」の状態を言い表すのに相応しい、古典語の形容詞を考える。
*主観的で赤裸々な心情や状態の描写と、客観化した冷静な観察とが同居する『枕草子』の表現を想起し、まとめの方向を示す。
*板書に位置づける。
・ノートに書き込んでいることで評価する。
(板書計画は省略)

実際の授業での生徒の反応は以下の通りである。

生徒学習記録5 (むとくなるもの)

今日は、『枕草子』の類聚的章段の「むとくなるもの」について学習しました。この章段でも、まず一般的に共通理解のある、情けない、みっともない、格好のつかないと思われていることが書かれていて、次に清少納言独特なものの表し方で、格好のつかないような具体例が書かれていました。

具体例では、女と男がけんかをして、夜中に寒くなって女が男の寝具にもぐり込むことはなんとも格好がつかない、ということがまとめられていました。「うれしきもの」や「ねたきもの」では「をかし」という形容詞が使われていたので、「むとくなるもの」でも「をかし」が使われるべきだが、その「をかし」を清少納言が自分で書ききっていませんでした。ということは、この具体例は清少納言本人の経験談で、この章段を書くときに男の知らん顔をしている様子を思い出し、また清少納言は決まり悪く思っ、「をかし」が書けなかったのではないかと、思います。

6. まとめ—比べ読みの到達度—

学習のまとめとして、「類聚的相談において、何をどのように取り上げているのか」という点に注目して、筆者清少納言のものの方の見方や表現の仕方の特徴、あるいは人物像についてまとめる」という課題でレポートを課した。以下に抜粋して紹介する。

渡線は「文体」としての類聚的章段の構成への言及、傍線は「をかし」が表す清少納言の感覚や表現への言及の部分である。

生徒レポート1

『枕草子』類聚的章段を読んでゆくなかで、一つの構造パターンが見えてくる。まず初めに「もの」に対

する一般的で誰もが共感できる事柄の羅列があり、そして次に筆者の実体験などに基づいた個人的な感覚や価値観が述べられている、というものだ。筆者はなぜこのような構成をとったのだろうか。現代文的な読み取り方法で言えば、この方法は筆者の意見を強調させるために使うものなのだろうが、思いついたことを脈絡なく並べるといふ清少納言の文体の特徴に鑑みると、それは違うようにも思える。むしろ、一般的な事柄の羅列というのは、その後にくる連想ゲームのような発想につなげてゆくための助走の段階なのではないか。また、「うれし」から「をかし」、「ねたし」から「をかし」といった心情の変化も類聚的章段に出てきた。しかし類聚的章段には「をかしきもの」という段は無いのである。もしかすると清少納言は、類聚的章段全体を通して「をかし」という一つの大きな章段にしようとしたのかもしれない。そこまでいなくても、「をかし」という感情が清少納言のものの方の見方に大きな位置を占めていることは確かだろう。

生徒レポート2

清少納言は頭の回転の速い女である。類聚的章段には、「うれしきもの」「ねたきもの」などテーマ別に、いくつもの出来事が取り上げられているが、ただ数が多いから回転が速い、というだけではない。清少納言は、見たこと感じたことをそのまま取り上げるだけで済ましてはいない。まず一般的な共通項目の列挙から入り、次に清少納言自身の体験などが語られている。ただ単に「うれしいことは……、しゃくにさわるのは……」だけで終わらせるのではなく、そこから連想ゲームでもするかのように発想を広げ、さらには「をかし」という言葉でまとめてまわっている。自分の直接的な感情だけでなく、物事から一步離れたような視点をも加えて『枕草子』は描かれている。清少納言は、物事を見るときに、自分を当事者に設定したり、観察者に設定したりすることが上手く、時にはそれを同時に行っていたのかもしれない。そう考えると、清少納言はなかなか油断のできない女なのである。

生徒レポート3

清少納言は類聚的章段の冒頭では説明不要の、当時の人々に共通の感覚で理解できる項目を列挙している。その部分は、現代の私たちにも理解できるものが多いが、人が無意識に共有しているものを「書く」ことで意識化し、日常を客観的に見るという点では、日記と似ている。清少納言は、自分が書いた事柄に関連させて次々とふくらませているので、頭の回転が速い。また、ある出来事について書くときに、出来事というよりは、出来事に対する人々の反応に重点を置いている。自分の身の回りで生じている、人々の様々な感情のあ

り方を生々しく表現している。さらに、各章段で「をかし」という表現を用いているのは、そのような人間の感情の多彩さにおもむきやおもしろさを感じているのと同時に、自身の観察力を意識しているのだろう。ここで使われている「をかし」は、きっと私たちがメールで使う《笑や、《苦笑、のようなもので、清少納言のその時の気持ちを一時的にまとめたものではないかとも思う。

生徒レポート4

各章段で何度も登場する「をかし」について、私は最初は、人間の本質的な部分や無意識な所を見ると、人間のかわいらしさのようなものを感じて、それを「をかし」と書いているのではないかと思っていた。しかしそれではつじつまの合わない所もある。「ねたきもの」で命婦乳母が縫うのに失敗した着物を、源少納言などが仕方なく縫い直しているのを見て「をかし」と言っているところだ。清少納言は、人や出来事に対して「をかし」と思っているというよりはむしろ、自分の心の動きを興味深く見つめているのではないだろうか。命婦乳母にあきれている時に、不意に他の女房の上品さを感じる。また、勝負事に勝つてうれしい気持ちの中で、相手はどう思っているのかと想像する。そのような二つの感情が心の中で同時にある状態が、彼女を楽しんでいる気分、「をかし」とさせているのではないか。清少納言は賢く鋭い観察力をもつ一方で、自分の感情を掘り下げて見つめることを厭わず、日常生活に従事しているというよりは、どこかしら地に足の付かない所があるようにも感じる（貴族とはみなそういうものなのかも知れないが）。そう思うと、私は彼女にかなり親しみを感じる。彼女はまるで現代の女子高生のようなのだ。

生徒レポート5

清少納言という人は、自分の気持ちに正直で、すました顔をしているようでも本当は激情に身を焦がしているように思う。一般常識があるようで、実は世間とはずれているように感じられて、彼女自身もしかするとそのせいで悩んでいたのかもしれない、と思えてしまう。文章自体をみても、読むとあきれてしまうような内容でも、細かいタッチで臨場感あふれる描き方もできるし、ユーモアにまぶして描いたりして、話の流れがスムーズに進んでいるものもあるし、またそうかと思うと、話が飛んでしまっていて気持ちに筆が追いついていない、せっかちな部分もあるようだ。清少納言という人の、人間の面白さと不完全さとがそのまま表れているようで、とても面白い。

生徒レポート6

清少納言の発想力と頭の回転の速さはよくわかるが、

類聚的章段において列挙されている項目を見ると、構成が練られている様子はない。おそらく彼女は物事を深く考え合わせるよりも、自分の思いつきにのせて気ままに文章にする方が好きなのだろう。また、内容に目を移すと、高貴な対象への尊敬や思い人への愛情も伝わってはくるが、それにもまして、普通人が避けるようなマイナスイメージの事柄について、おもしろみを感じていることがわかる。人が落胆するさまはもちろん、清少納言自身の体験に基づくと思われることも詳細に記されている。彼女は、自分の意見をはっきりと持ち、自負心も兼ね備えているようなので、自らの失敗談をも文字にして残した、というのが私には意外だった。しかし彼女の中ではプライドよりも身の回りの出来事に面白さを感じる心が優先されているようで、だからこそ皆が共感できるようでいて、その実は清少納言独特の趣きの詰まった世界が出来上がったのだと思う。

これらのまとめに明らかなように、今回の比べ読み学習によって、清少納言という人物像や、『枕草子』というテキストの特徴を、具体的に捉えることができた。

これは、何か自分とは関係のない、別次元での感情の表れや事柄の表現として抽象的観念的に理解したということではない。また、複数のテキストに共通する骨子としての、痩せ細った最大公約数を取り出しただけのものでもない。

比べ読み学習でのポイントは、あれこれの場面や状況、文脈から抽出された共通性を、自らに当てはめ確認することによってもたらされる、読みの具体性と現実感である。それは、時代を超えて人間に共通する普遍性の確認であったり、筆者と読者である生徒との間での個性や独自性が響き合っていることの確認である。比べ読みをすることで、読んだテキストの数を増やすだけではなく、自身を振り返る回数を増やし、質を高めることにつながるのである。

今回は、2009年度一学期に実施した『枕草子』類聚的章段の扱いを中心に、比べ読み学習の具体的展開と到達度についてまとめた。この学習を受けて、二学期にはさらに発展したものとして、『枕草子』日記的章段についての比べ読み学習を行っている。これについては、稿を改めて報告したい。